国指定重要文化財 高知城

南海の名城・高知城

高知城は、日本で唯一本丸の建築群がすべて現存する、江戸時代の姿を今に伝える城郭である。

もともとこの場所には南北朝時代に築かれた大高坂城があり、戦国時代には長宗我部元親が岡豊城より移り築城に取り組んでいた。しかし、治水に難儀し、わずか3年で元親は浦戸城へ本拠を移した。その後、関ヶ原の戦の功績で遠州掛川より入国した山内一豊（やまうちかつとよ）がこの地を城地と定め、慶長6年（1601年）秋から築城をはじめた。

一豊は築城家として知られた百々越前守安行を総奉行に任じ、近隣諸村から石材や木材を取り寄せ工事を進めたが、難工事の末城のほぼ全容が完成したのは10年後、二代藩主忠義の治世に移った慶長16年のことであった。享保12年（1727年）には一部の建物を残し焼失。ただちに復旧にあたったものの財政難もあって天守閣が復興するまでに20年以上の歳月を要している。その後、明治維新により廃城となり本丸と追手門を除くすべての建物が取り壊され、公園となっていまに至っている。別名を鷹城。

高知城みどころ案内

石樋

雨の多い土佐のこと、高知城において「雨仕舞い」は敵からの防御と並び重要であった。城内には多くの水路が設けられ、石垣から飛び出した石樋で排水していた。城内で16箇所が確認され、本丸の石樋はいまも現役である。三ノ丸で発掘された水路と石樋は構造をいつでも見ることができるようになっている。

●●●

石垣

高知城の石垣は、近江の技術者集団・穴太衆（あのうしゅう）によるもの。雨の多い土地柄を考慮し、崩れにくく排水能力も高い野面積が多く採用されている。見かけは雑にみえるが、非常に頑丈な築き方である。

なお、城内では杉ノ段にある石垣と鉄門にある打込ハギの石垣が特に美しく、必見。

三ノ丸では、長宗我部元親がこの地で築城した際の石垣が発掘され、見ることができる。

防御

軍事拠点としての城の性格を伝える貴重な遺構が高知城には数多く残っている。

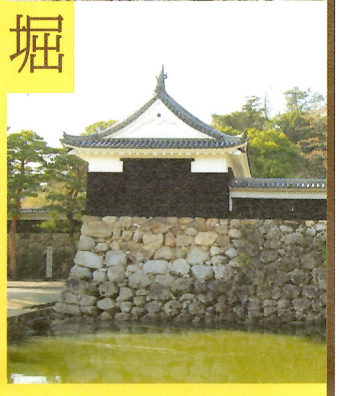
城内の各地でカギ状に曲がる石垣は「横矢掛り」といい、死角をなくしてどこからでも弓矢を敵に浴びせられるようにするための仕掛け。

塀に開いた丸、三角、四角と様々な形を持つ「矢狭間」は、ここから弓矢で敵を駆逐するためのもの。

最後の砦である天守には「石落とし」と「忍び返し」の鉄剣が設けられており、これを突破して天守に取り付くのは至難の技だ。

●●●

堀



高知城をめぐる堀のうち、現在残されている堀は約1/3足らず。また、堀の幅も現在では半分近くになっているほか、城のそばにあった土塁も撤去されているなど江戸時代とは大きく様子が変わっている。昔は城の北側を流れる江ノ口川から水を引き入れていた。

高知城略年譜

慶長6年【1601年】	山内一豊が土佐に入国し浦戸城を居城とする。大高坂山に高知城築城を開始。
慶長8年【1603年】	本丸と二ノ丸の石垣工事が完成。8月21日、山内一豊が入城する。大高坂山の地名を「河中山」と改める。
慶長15年【1610年】	河中山を「高智山」と改める。
慶長16年【1611年】	三ノ丸が完成しほぼ全城郭が整う。
享保12年【1727年】	城下町の大火で追手門を残し天守閣はじめ城郭のほとんどを焼失する。
享保14年【1729年】	深尾帯刀を普請奉行に任命し城郭再建着工。
寛延2年【1749年】	天守閣をはじめ櫓・城門などが完成、現在の天守閣はこの時のもの。
宝暦3年【1753年】	再建以来25年目にしてほぼ全城郭が整う。
弘化3年【1846年】	天守閣の修理を行う。
明治7年【1874年】	高知公園として一般開放。
昭和9年【1934年】	国宝に指定される（昭和25年文化財保護法施行により重要文化財となる）。
昭和23年【1948年】	天守をはじめ各建物の修理を始める。
昭和34年【1959年】	修復工事完成。史跡指定。
平成13年【2001年】	築城400年祭を開催。
平成22年【2010年】	三ノ丸石垣修復工事完成。

記念スタンプ

開館時間　午前9時～午後5時　休館日 12月26日～1月1日

高知城管理事務所 780-0850 高知市丸の内1-2-1 TEL.088-824-5701 http://kochipark.jp/kochijyo/

高知城の周辺を歩く

❶**坂本龍馬誕生地碑**／海援隊隊長。薩長同盟の締結や「船中八策」の起草などを通じ大政奉還実現に尽力。すぐ近くに「龍馬の生まれたまち記念館」がある。

❷**寺田寅彦記念館**／物理学者、随筆家として著名。夏目漱石と親交があり「吾輩は猫である」「三四郎」の登場人物のモデルとされる。

❸**致道館門**／文久2年（1862）に創設された藩校で、その門だけが残っている。

❹**土佐山内家宝物資料館**／土佐藩に伝わる古文書、美術工芸品、歴代藩主の遺品などを所蔵展示する博物館。

❺**旧山内家下屋敷長屋**／山内容堂（やまうちようどう）の別邸下屋敷の警護に就く武士の宿泊所で、国指定重要文化財。

❻**大川筋武家屋敷資料館**／城下で唯一残る武家屋敷。書院造の主屋と長屋門がある。

❼**野中兼山邸跡**／江戸時代初期の家老で港湾整備や灌漑、森林整備など殖産興業に尽力し、土佐藩経済の礎を築くも、後に失脚。

❽**山内容堂誕生地**／15代土佐藩主で、幕末四賢候の一人として中央政界で活躍。公武合体派であったが、後に龍馬や後藤象二郎の意見を受け大政奉還を徳川慶喜に建白。

❾**武市瑞山殉節之地碑**／土佐勤王党党首。尊王攘夷運動に奔走し、一時は土佐藩政を事実上牛耳るも、後に切腹に処された。

❿**板垣退助誕生地**／明治政府で参議を務め、後に自由民権運動の最高指導者として活躍。追手門を入ってすぐに銅像がある。

⓫**後藤象二郎誕生地**／大政奉還の実現にむけ活躍。明治以降は政治家となる。

⓬**日曜市**／300年続く日本最大の街路市。

⓭**吉田東洋記念碑**／幕末に容堂を助け活躍。先進的な政策をとるも、武市瑞山の命を受けた土佐勤王党の志士に暗殺された。

⓮**立志社跡**／明治7年に板垣退助と片岡健吉らにより設立され、自由民権運動の中心的役割を果たした。

⓯**はりまや橋**／江戸時代初期の豪商播磨屋宗徳と櫃屋道清が両家の往来をするために架橋。よさこい節の「坊さんかんざし」で名高い。

本丸

8 天守閣

外観四重（内部3層6階）高さ18.5mの望楼型天守で、創建当初の様式を踏襲して1749年に再建された。大入母屋とその上の唐破風、黒漆で塗られた高欄が特徴的で、1階北東角には現存するものとしては全国唯一の忍び返しもある。

本丸御殿上段ノ間

9 本丸御殿など

本丸には天守閣・本丸御殿・納戸蔵・廊下門・東多聞・西多聞・黒鉄門などの建造物が残る。現存十二城のなかでも、本丸御殿を残すのは高知城のみで、いずれも国の重要文化財に指定されている。東多聞は武器庫、西多聞は本丸警護の武士の番所、納戸蔵は藩の重要書類の収蔵、黒鉄門は儀式の際に藩主が出入りするのに用いられた。
御殿の書院は正殿、溜ノ間、玄関からなり、正殿には一段高くした上段ノ間があり、西側には武者隠しがある。欄間は土佐の荒波を表現したものになっている。創建当初の御殿は金箔張の襖など贅を尽くしたものであったが、再建時には全体に質素な造りになったという。

◉本丸への順路

まっすぐルート
追手門～本丸まで約8分。急な階段が続きますが、最も早く本丸に到達することのできるルートです。

ゆったりルート
杉ノ段から梅ノ段、三ノ丸を経由。あまり知られていない城の風景を楽しめます。追手門～本丸まで約20分。

南 西 北 東

1 2 3 4 5 6 7 8 9

本丸 本丸御殿 黒鉄門 西多聞 廊下門 東多聞 涼風亭跡 御台所屋敷跡 馬場跡 搦手門跡 城内三社跡 乾ノ櫓跡 乾櫓跡 水ノ手門跡 数寄屋櫓跡 下屋敷跡（県庁） 物見窓 鐘撞堂 犬走 太鼓丸 井戸跡 忍び返し 横矢掛り 長宗我部時代石垣展示 丑寅櫓跡 杉ノ段 板垣退助銅像 山内一豊の妻像 銀杏並木 紅葉並木 打込ハギの石垣 杉並木 至高知公園駐車場

6 梅ノ段

杉ノ段から左手に進むと、かつての馬場が梅苑となっている（梅ノ段）。ここから西へ下ると「御台所屋敷跡」や城下町民の氏神であり祭礼時に限り庶民の参拝が許された八幡宮跡（現高知八幡宮）の小祠がある。城内には八幡宮のほか諏訪大明神、厳島明神があり、城内三社といわれた。

1 追手門

石垣の上に渡櫓を載せた櫓門で、城の大手（正面）にふさわしい堂々たる構えを持つ。門前は枡形になっており、防御時には石垣上の狭間塀や門上から攻撃できるようになっている。また、門の2階には「石落とし」もあり、敵の直上から石を落としたり槍を突くことができるようになっている。門前の石垣は城内で最も巨石が多くみられる場所であり、工事の際に印された「ウ」、「エ」、「ケ」、「シ」などの刻印も確認することができる。

2 追手門から杉ノ段まで

追手門をくぐり左手の石段を登り詰めると杉ノ段に至る。石段は登りにくく下りやすいよう幅が工夫されている。現在は蓋がされている井戸は良質の飲料水を汲めたことから、藩主の居住する二ノ丸御殿まで毎日10時、12時、16時の計3回運ばれていたという。藩主のお国入りや出駕の時には、一族がここまで送迎に出向いていた。

詰門

3 鉄門跡と詰門

杉ノ段から右手に石段を登ると打込ハギという手法で築かれた堅牢な石垣が目立つ鉄門跡に至る。当時は門扉に多数の小鉄板が打ち付けられ、門内には小さな枡形が設けられた重要な防衛ポイントであった。再建時に積み直された石垣には、石を割るための楔の跡も残っている。
鉄門跡の階段を越えると右手前に三ノ丸、右手に二ノ丸、左手に本丸と天守閣が迫り、真正面には数段の石段越しに黒塗りの詰門がみえる。敵はここで自然に正面の詰門側へと誘導され、石段を登るが最後、三方から矢と鉄砲の嵐に見舞われる。門内は侵入した敵が容易に通り抜けられないよう、入口と出口の扉の位置が「筋違い」に設置されており、1階は籠城用の塩を貯蔵する塩蔵になっている。

4 三ノ丸

かつては三ノ丸御殿があり、年中行事や儀式を行っていた。長宗我部元親による築城時の石垣が発掘され、その一部の遺構を見ることができるようになっている。

5 二ノ丸

藩主の暮らす二ノ丸御殿があった。北東には家具櫓や数奇屋櫓などがあり、これらの櫓はその名前が示すように調度や道具類を収納していた。西端には3階建ての乾櫓があり、さながら小天守のようであったといわれる。

7 本丸へ

詰門は本丸と二ノ丸をつなぐ役目を果たしており、藩政時代には「橋廊下」と呼ばれた。2階は家老・中老などの詰所として用いられ、現在の呼称はここからきている。
壁には隠し銃眼が設けられている。本丸の入り口には廊下門があり、ここをくぐると本丸に至る。

国指定重要文化財／現存十二城天守／日本百名城

重要文化財・史跡

高知城

天守・懐徳館

高知城天守は江戸時代から現存する十二天守の一つです。なかでも、本丸のすべての建造物が完全に残っているのは高知城だけです。

天守最上階からの眺め

山内一豊と妻【御殿】

テレビドラマ「功名が辻」山内一豊(初代藩主)と妻、千代の押絵作品。

土佐の焼き物【廊下門】

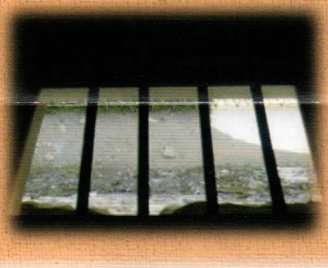
尾戸焼は1653年に土佐(現在の高知県)で始まり、藩窯として発展し、歴代藩主(山内家)の贈答品。

鬼瓦【天守１階】

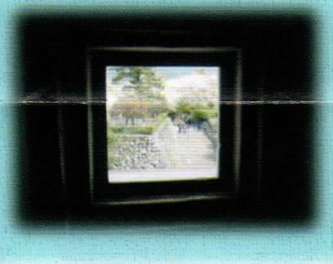
屋根の各所に置かれている鬼瓦は、城を守る魔除け。

急勾配の階段【天守】

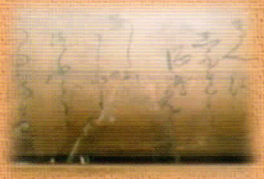
石落し【天守１階】



銃眼【天守１階】



追手門柱包板落書【天守１階】



追手門で見つかった落書き。「禁酒したれど　酒屋みれば　足がしとふあと　あゆまれぬかな」

九十分の一模型【天守２階】

城のほとんどの建造物は、1727年の大火で焼失したが、後に再建。

鰹節（かつおぶし）【廊下門】

土佐沖ではカツオ漁が盛んで、宇佐や土佐清水の漁村では、古くから鰹節が作られている。

一領具足（いちりょうぐそく）【東多聞】

長宗我部元親の遺臣は山内の入国に際し抵抗した。一領具足とは、平時は田畑を耕しながらホラ貝が鳴れば兵として戦う長宗我部の家臣のこと。

航空写真

Q: なぜ高知城は壊されなかったのでしょうか？

A: 1873年、明治政府は廃城令を発布しました。多くの指導者が、城が不平士族の反乱の拠点として利用されることを恐れたからです。高知城は、当初存続すべき約40の城の中に含まれていませんでしたが、結局取り壊しを免れました。それは、高知県がいちはやく公園化することを国に申し出たからと言われています。

編集：高知SGG善意通訳クラブ　　監修：NPO法人 土佐観光ガイドボランティア協会

発行：高知城管理事務所　　2017年5月

詰門

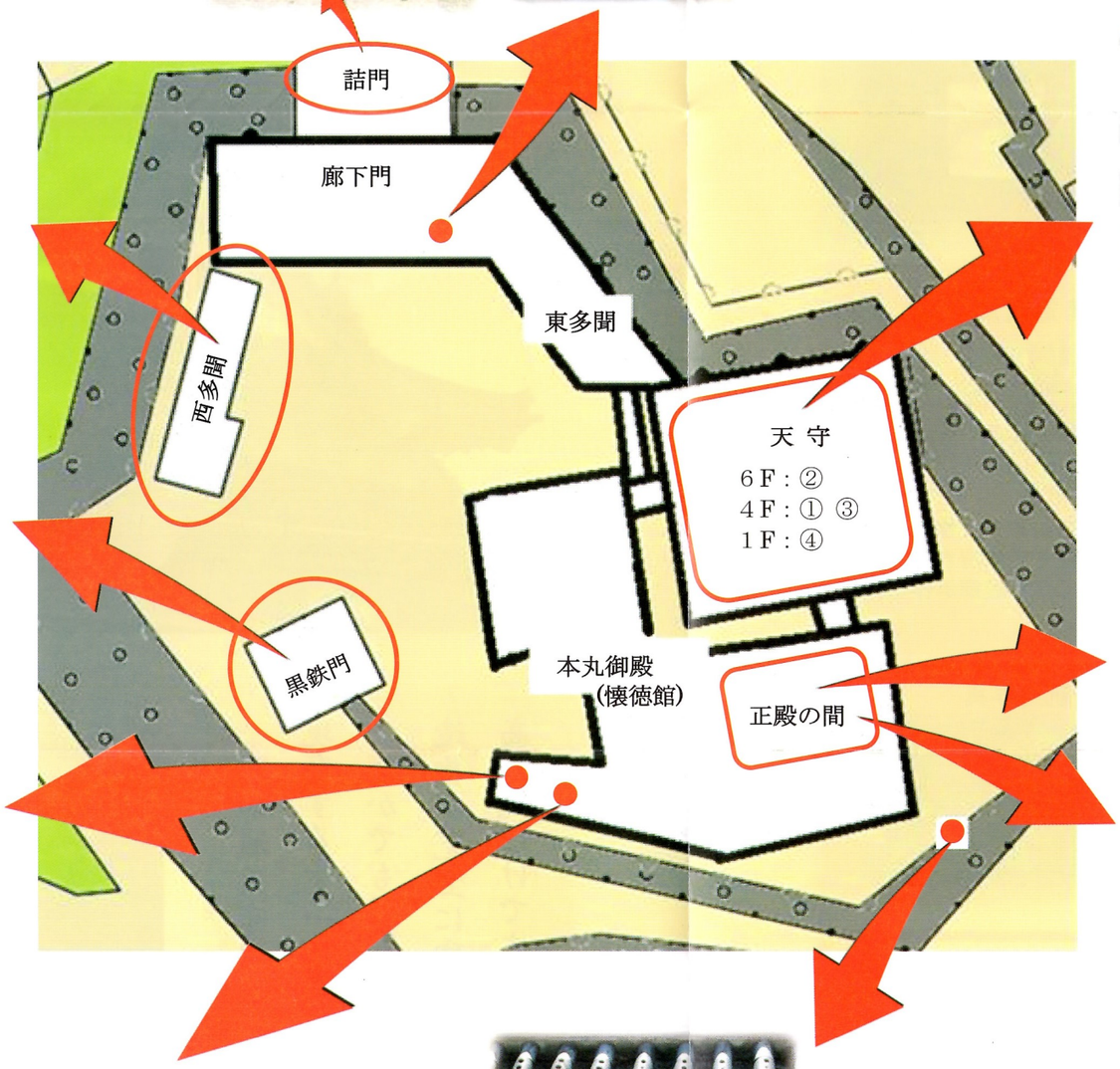
本丸と二ノ丸の間の堀切に設けられた櫓門である。廊下橋としての役割も担っており、二階部分は、藩主のもとに向かう家老の待合場所であったことから、詰門の名が付けられたと言われている。
一階部分は、籠城に備え、塩蓄える蔵になっている。入口は、東面と西面で食い違いになっており、攻め寄せた敵が容易に突破できない構造となっている。

捕鯨

仏教では肉食を禁じていたので、鯨肉は日本人にとって重要なタンパク源であった。20 世紀の初めにノルウエー式近代捕鯨が導入される以前は、クジラの回遊の多い室戸岬近海で、模型のような網捕り捕鯨が行われていた。

西多聞

本丸を囲む櫓の一つ。多聞櫓は、長屋状の建物のこと。
本丸の西側の守りを両側に延びる矢狭間塀とともに担っている。内部は二部屋に別れている。外壁は、分厚い漆喰で塗籠られており、火災から守ると同時に風雨に備えたものとなっている。



黒鉄門（くろがねもん）

本丸南側を固める門。守りを堅固にするため、扉の外側には、漆黒で塗られた鉄板が打ち付けられている。
この様子から、黒鉄門と名付けられたものと考えられている。二階部分は、武者が隠れることが出来る様になっており、門の外側に石落としが設けられるなど防御性の高い門となっている。

家紋

これは「丸三葉柏紋（まるにみつばがしわもん）」と呼ばれている山内家の家紋。土佐藩船の船印として使われていた。土佐出身の岩崎弥太郎が三菱を興した時、山内家と岩崎家の家紋を統合させて会社のロゴを作成した。

①鯱（しゃち）

高知城では東西の大屋根と南北の最上部に雌雄一対ずつ鯱が飾られている。中国の伝説によると、鯱は火を防ぐ魔法の力を持っていると言われている。

②高欄（こうらん）

高欄は装飾的な建築上の要素を持ち、また権威の象徴でもある。この高欄を取り付けるため、一豊は徳川家康に特別な許可を願い出た。

③日本の城の写真

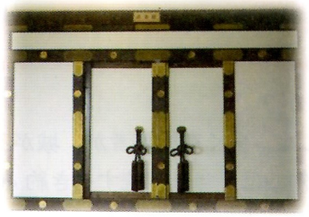
高知城は、江戸時代から現存する天守 12 城のひとつ。

④高知城築城の模型

築城工事は 1601 年に始まり、完成には 10 年の歳月がかかった。1 日約 1200～1300 人の技術者や人夫が雇われ、日当として米 7 合と味噌代が支給された。一豊も一日おきに馬で巡視に来ており、この時、長宗我部の残党に襲撃されることを警戒して、一豊と同じ装束をした 5 人の家来が同行していた。

上段ノ間

藩主は「上段ノ間」という一段高い場所に座り、来訪者と対面した。この部屋は、日本の伝統的な建築様式である書院造りで造られている。1727 年の大火以前は、襖（ふすま）などは金箔張りで名匠の絵が描かれていたと言われている。



武者隠し

この部屋には、藩主が客に襲われた場合に備えて、武装した侍が待機していた。

欄間（らんま）

欄間とは、部屋を仕切る襖の上の方に取り付けられた、透かし彫りの板のこと。欄間は装飾だけでなく、通風や採光の為にも使われた。ここにある 4 つの欄間には、それぞれ(1)「沢潟（おもだか）に鴛鴦（おしどり）」(2)「慈姑（くわい）に水鳥」(3)「水に睡蓮」(4)「梅の枝」が彫られている。

物見窓（ものみまど）

鉄砲狭間から覗いているだけでは、敵兵全体の行動を把握するのは難しく、矢狭間塀の上面寄りに一間幅で、横連子の武者窓を設けている。本丸東南面の物見(偵察)を一手に引き受けていた重要な窓で、高知城だけに残っている。